

障がいと共に生きるアーティスト達と
そこにある世界を発信するフリーペーパー

Hugs

はぐす

について

「Hug」という言葉には、“愛情をもって抱きしめる” “こだわりを守り続ける” “自分自身を幸運だと思う”などの意味があります。フリーペーパーHugsは、障がいと共に生きながら創作や表現活動をしている方々や施設を取材し、その活動の様子や日々の思い、そこから広がる豊かな世界を伝えていくことを目的にしています。

創刊から福祉施設を紹介してきましたが、今年度から個人やプロジェクト等にも焦点を当てた内容にしていきます。またnoteでの発信を中心にし、フリーペーパーはダイジェスト版として発行してまいります。



まみちゃん

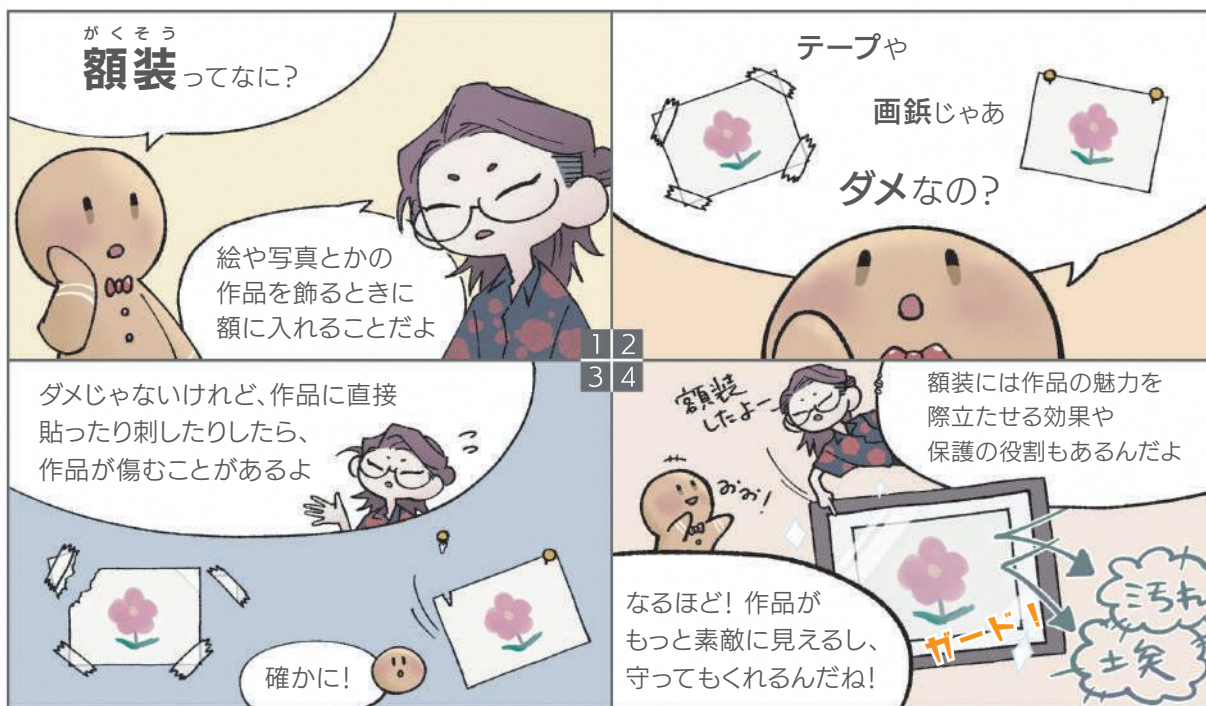
https://note.com/freepaper_hugs/
こちらのQRコードからもアクセス可能です。



ハグちゃん



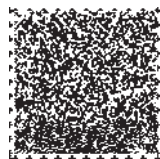
創作活動ワンポイント講座



編集後記

創作活動をしている施設に行くと、楽しく、あたたかな気持ちになる。作品を創っているみなさんは、純粋で、優しい人が多い。家族で食べた食卓の絵を描く人、大好きなバスの絵をひたすら描く人、好きな刺繍に没頭する人…。その作品は僕らの想像を超え、忘れがちな気持ちを思い出させてくれる。そんな作品をモチーフにした日常品を通じて、彼らと社会の接点が増えつつある。からふるさんのショーウィンドウに「アートを仕事に」という言葉があった。一人でできなくても、みんなでやれば、そんな未来も夢じゃない。

藤田和俊



これは「Uni-Voice」という
音声コードです

Hugs 2025年夏号 vol.12 / 2025年7月1日発行

発行 / あいサポート・アートセンター
〒682-0018 鳥取県倉吉市福庭町1丁目105番地2
TEL/FAX: 0858-33-5151
E-MAIL: tottori.asac@gmail.com
HP: <https://aisapo.art/>

取材・編集・撮影 / 合同会社 僕ら
藤田和俊
デザイン / 森下真后
協力 / 鳥取県

障がいと共に生きるアーティスト達とそこにある世界を発信するフリーペーパー

Hugs

はぐす

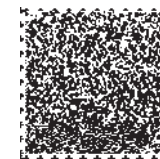
2025年夏号 vol.12

表現することは、

誰かとつながることは

特集

福井将宏 ふくい まさひろ
(アートスペースからふる)



これは「Uni-Voice」という
音声コードです



福井将宏（アートスペースからふる）

10代の頃から「アートスペースからふる」の前身であるアート教室に通いはじめ、約20年にわたって花を題材に絵を描いている。大胆な構成と筆使いで、シンプルでいながら力強さや存在感のある絵が認められ、国内外の障がいのあるアーティストと共に新たな文化の創造を目指す岩手県発のアートライフスタイルブランド「HERALBONY」も抜擢。油性ペンで縦横無尽に文字を書く「福井フォント」も人気を集めるアーティスト。日本財団DIVERSITY IN THE ARTS蔵座恵美賞受賞。

その絵は、見るものを惹きつける。鳥取市の若桜街道にある一般社団法人「アートスペースからふる」（以下、からふる）に通う福井将宏さんが描く絵は、ダイナミックでどこか優しい。からふるは障がいのある人が通う就労継続支援B型事業所で、利用者は絵画や造形の作品を作り、販売したり貸し出したりして収益を得ている。得意なことや好きなことを、それぞれのペースで創っているが、福井さんは17歳の時、からふるがアート教室だった頃から通い始め、20年間、ずっと花の絵を描いてきた。



ダイナミックで、優しい花

描く姿もまた魅力的だ。真っ白のキャンバスに、豪快に筆を走らせる。「枠なんて関係ない」と言わんばかりに、筆は枠の内と外を行ったり来たり。キャンバスには、水分が溜まった箇所や絵の具が突起物のようにになっている箇所もある。

「画風も変わってきて、昔はもっと枝ぶりとか細かく描いていたんです。最近は観念的というか、『この花だったらこうだろう』という感じで、自分でアレンジして描いています」

そう話すのは、からふるの理事長、妹尾恵依子さん。他の対象物を描いてみたこともあった

が、花を描くときが一番楽しそうだったという。花を見つめ、どの絵の具にしようかを自分で決める。描き始めたらいつもの早技だ。

「私も絵を描きますが、こうしたら人が喜ぶだろう、驚かせられるだろうと狙ってしまうことがある。でも、固定概念や常識みたいなものでなく、素直な作品が多い。みんなの作品にいまだにワクワク、ドキドキさせられますね」

感性のままに、自由に。その作品は、想像の枠を超えてゆく。

母とのやりとりから始まった自己表現

福井さんが自らの意思を表現するようになったのは小学生の頃。母の妙子さんは、あの日のことを嬉しそうに振り返る。

「ずっとコミュニケーションのやり取りができなかったんですが、ある日、リサイクルのゴミを集めて形をつくり『これ、これ』と訴えてきたんです。どうやら消防車って言いたかったみたいで、それがわかったときはもう嬉しかったですよ」

絵や文字で表現することは、人とつながる手段になった。妙子さんは絵の描き方を正そうとしたり、何かを強いたりすることはしなかったという。

「金魚を描いてみたら、将宏は紙全体を朱色に塗り潰して真ん中に拡大したヒレだけ（笑）。そういう時でも『これはこうでしょう』みたいなことは言わなかった。だって、せっかく自分から出したもの。表現してくれたものは全部受け止めようと最初から思っていました」

妹尾さんも、親子の関係性がとても素敵だと言う。

「お母さんが、作品を見るたびに『こういう風に見えたのね』と褒めてくださる。それが自信になって今につながっていると思いますよ」

アートを通じて誰かとつながる

出勤してくると、まずはカレンダーをチェックし（歯医者予約日が一番気になるそう）、ロッカーに荷物を入れる。鍵の角度が少しでも曲がっていると、ゆっくり水平に直して、一気にボタンと扉を閉める。

「彼はこだわりが強いけど、多分、美しいものが好きなんです。描いている文字を重ねてみたらミリ単位で重なってびっくりしました。彼にとって、それが美しい文字の位置だったということがよくわかりました」

「福井フォント」と呼ばれる文字も作品の一つ。A5の紙いっぱい「中電ふれあいホール」「鳥取県立図書館」など、お気に入りの場所を書くのだから。文字やデザインが施されているチラシが好きで、休憩中も壁のチラシをずっと見ている。

障がいのある人たちの作品を世の中に届ける岩手県発のアートライフスタイルブランド「HERALBONY」（<https://heralbony.com/>）も注目。ブランドのアーティストに抜擢された。妙子さんはいまだに驚きを隠せないという。

「うちの子でいいのかしらと、今でも思います。でも、一人の力でできるものじゃない。絵を描かせてくれたからふる、デザインしてくださったヘラルボニーさん、それを作ってくださった職人の方々。周りの皆さんのおかげです」

絵を始めた頃に描いたことが、少しずつ叶ってきている。

「こだわりが強く、社会参加ができないと思っていました。なんとか絵や文字が代わりに社会や人とつながる手段になってくれたらいいなと思っていました。作品が収入になるのも嬉しいこと。でも、本人が生きていく上で、暮らしていきやすくなれば、それが一番の願いです」

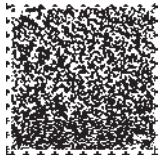
表現は誰かとつながるきっかけ。この取材を通してそうだった。一日を過ごし、最後にはカメラ目線での撮影をお願いしてみた。「言うことを聞いてくれるだろうか」と心配をよそに、とても良い顔でこちらを見てくれた。



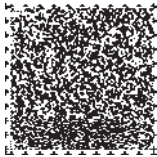
▲左：アートスペースからふる 妹尾理事長
右：福井妙子さん



▲福井将宏〈金魚〉



これは「Uni-Voice」という音声コードです



これは「Uni-Voice」という音声コードです